

## 角尾内科学教室

当時、教室員は角尾晋教授の下に、箆島四郎助教、高橋博講師、中村匡邦助手、牛島百合子副手、黄過伝、大倉一郎、土山敏夫、黄永超、吉崎励子、深見武久、尾崎哲郎、井上正良の各副手補。それに村田千秋、村上吉作、鈴木四郎の学部仮卒業生。木田橋良道、清田和之、樋渡俊夫の医専仮卒業生。江下ススム看護長以下二十七名の看護婦と給仕松尾マサノ氏が勤務していた。

### 被爆時の状況

角尾教授外来診察室で（本館三階西端北側の室）、箆島助教、高橋講師、中村助手は内科病棟三階の角尾内科看護室（南側）で、その他大部分の教室員、看護婦は本館三階で外来の診療に従事中、前田婦長外二、三人の看護婦は治療室で被爆した。

角尾教授は爆心に背を向けて診察中であつたため、背部に窓ガラスの破片による傷多数で大腿の傷は相当に深く歩行困難にて、裏山に救出し、後調教授の手当を受けられ、その夜は皆裏山にて、夜を明かした。その翌日背負つて外科教室横の防空壕に移し加療し、十二日夜道の尾に軍のバスにて移り、後、大神宮にて加療、死亡前一週間頃から放射能症状即ち高熱、皮下溢血、口内炎起り二十二日朝なくなつた。

高橋講師は被爆一週間後頃から発熱、口内炎を起したが治療の結果治

癒。

村上吉作副手（昭二〇学部仮卒）は死体発見出来なかつた。恐らく内科病棟と外来病棟の間の木造の廊下にいたものと思われる。

村田千秋副手（昭二〇学部仮卒）は第二新患室において負傷、裏山迄運び出したが間もなく死亡。

鈴木四郎副手（昭二〇学部仮卒）清田和之副手補（昭二〇医専仮卒）木田橋良道副手補（昭二〇医専仮卒）は自宅に帰り、加療中に死亡した。樋渡俊夫副手補（昭二〇医専仮卒）は高北に入院中被爆、数日加療したが遂に死亡。

黄過伝副手補も加療中、遂に死亡。

前田婦長は角尾学長の看護に長くあたつたが、後気分すぐれず帰省静養、恢復。

内尾看護婦は受傷、立つ事出来ず、一ヶ月後郷里にて死亡。

加藤、大山看護婦は寄宿舎にいた頃にて死体も不明。

検便室にいた宮本、吉本着護婦は瀕死の重傷、後死亡。

緒方看護婦も外来にて受傷、後死亡。

中山看護婦は高北の風呂場にて即死。

江下看護長は高南で死亡。

故角尾晋教授略歴

従三位勲二等、医学博士、学長、内科学教授

明治二十五年十二月二十日富山県に生る

大正六年三月東京帝国大学医学部卒業、卒業後大正十一年二月まで同大学副

手として内科学を専攻す

大正十一年六月内科学研究の為、欧米に留学、同十四年二月帰朝す

大正十二年四月長崎医科大学助教授に任ぜらる

大正十四年三月長崎医科大学教授に任ぜらる

昭和八年五月欧米各国に出張を命ぜられ、同九年一月帰朝す

昭和十一年七月長崎医科大学長に任ぜられ、内科学教授を兼ねる

昭和十一年十一月陸軍高等官一等

昭和十二年七月及び同十三年六月の両度に亘り満州国及び中華民國に出張を命ぜらる

昭和二十年八月九日、長崎医科大学に於て講義中、原子爆弾により受傷、同月二十二日鬼籍に列し歿に殉ず

主なる研究題目

黄疸の實驗的並びに臨床的研究

死亡者の官職並びに氏名

官職	氏名
官 長	角 尾 晋
教 授	角 尾 晋
副 手 補	黄 過 伝
給 仕	松 尾 マサノ
学 部 仮 卒	村 田 千 秋
医 専 仮 卒	村 上 吉 作
"	鈴 木 四 郎
"	木 川 橋 良 道
"	清 田 和 之
"	樋 渡 俊 夫
看 護 長	江 下 ス ム
四 年	内 尾 文 子
"	緒 方 ヒ サ カ
"	加 藤 ト シ 子
"	中 山 ヨ シ エ
三 年	本 田 ト シ 子
二 年	宮 本 ハ ル エ
"	大 山 フ ヨ 子
"	吉 本 ミ シ エ
一 年	前 田 節 子

## 角尾先生を憶う

箴 島 四 郎

私達の懐しい母校長崎医科大学があの恐るべき原子爆弾を受けて全く灰燼に帰して、ここに十年、當時を思い浮べると涙なきを得ない。私は時々角尾先生が廻診されている夢を見る。そしてほつとするとそこは現実である。今度当時の思出が出版される事になったが、私は角尾先生の一週忌に馬町の教会で、医局員代表として先生の御霊前でよんだ追悼の辞をその儘のせさせて頂くことにする。今読み直してみると幼稚な気のする所もあるが、先生がなくなつてから一年有余第一内科を守つていた頃、先生を思い浮べた気持はよく表れていると思う。

### 追悼の辞

私達の杖とも柱とも頼みした恩師角尾先生逝かれまして、こゝに一周年を迎えるに至りました。この一年は考えようで、まことに早く又まことに長いものでありました。それ程の間に色々の事を我々は経験させられ、これを省みるにつけても益々先生の偉大さを今更乍らしみじみと感ずるのであります。

憶えば昨年七月終から八月始にかけての東京御出張の帰途、先生は偶々広島を原子爆弾投下後に通過され、重いリュックサックを担がれて徒歩連絡され、その惨状を具に見聞され、阿鼻叫喚まことに此の世の地獄であると八月八日長崎に帰られ直ちに登校、色々私達にお話をされまし

たが、私達はその時はどうしてもこの話を十分に納得出来なかつたのでした。然し、然し、その翌八月九日には私達がこれを体験させられる運命とはなりました。

満目荒寥、生きとし生けるものの姿は無く、紅蓮の焰は天に沖し、時々上る龍巻は物凄きばかりでこの世の終りかと思われ、結局人間は自ら手により滅亡する日の来る事を信ぜずにはおられませんでした。

当日先生は外来診察中で負傷され、直ちに病院横の小山にお運び致しましたが、蒼白となられ嘔吐等もあり非常に憂慮致しましたが、翌日からは元氣になられ、この分ならばとほつと一息ついたのですが、十八日頃から三十九度以上の高熱続き、口内炎あらわれ、皮下溢血等も見られ、所謂放射線症状を起され、遂に八月二十二日午前十時逝去されました。

二十一日夜既に死期至るを感ぜられた先生は、お苦しみの中にも極めて静に且極めて明瞭に後事を遺言され、最後にさようならの一語を残されて遂に幽明境を異にされました。そのお最後は日頃のお忙しい、談論風発、八面六臂のお姿とは全く対照的にまことに淡々たるものでありました。今でもあの時の御様子が浮ぶようであります。

こゝに暫くありし日の先生のお姿を御追憶申上げる事をお許し下さい。先生はまことに現代日本の臨床家として、将又黄疽研究家として第一人者であられた事は何人も否む事の出来ない大いなる事実であります。而して先生はその御専門の内科学は勿論、医学全般の部門に亘り御知識豊に、それぞれ一家言を有しておられました。

先生は診療を以て己が天賦とされ、学長に就任された後と雖も一日としてこれをお捨てになられる事はありませんでした。その診療に當つて

は一寸も忽にされる事なく微に入り、細に入り全力を傾倒され、一見いかに簡単と思われる場合にも手を抜かれる事なく、事診療に関する限り長時間になるのも厭われず懇切丁寧を極めました。為に外来診察は午前中から午後三時に至るのも少くなく、廻診は夜の九時に至つた事もあり、電燈の消えた日に提灯を提げて廻診をされた等も今は返らぬ思い出となりました。先生は旧患を見る場合も常に新患を見るつもりで常に新しい観点から診察せよと言つておられ、先生は無言の中にもこれをお示しになりました。かゝる診療態度はその有せられる博学と共に何人も希求し得ない境地に先生を立たせたのであります。まことに先生は診療に生き、遂に診療に倒られたのでした。嗚呼先生は全く他に求め得られない臨牀の第一人者でありました。

一方研究方面に於ては多年黄疽の実験的並に臨牀的研究に専心せられ、今や黄疽研究の第一人者と世の斉しく認める所であり、黄疽に関する限りすべての人は先生の門をたゞくのを常としておつたのであります。

事診療、研究に関しては先生は極めて厳格で、廻診中に肩をたゞかれた者は極めて多く、又研究に当つては出来ないという事を非常に嫌われ、色々工夫してこれを突破するよう御指導されるのを常とし、講義等も一時間として休む事を非常に嫌われました。

事務、診療、研究室におられる外はいつも教授室で勉強され、東京に出張されても、早朝着かれると直ぐ登校廻診されるという状態で、ゆつくり休養される事は全然なく、私達はこの先生のお姿を思い起す度に自らを省みて恥ぢ入る次第であります。

一方平常は門下生を思われる事深く、先生を中心とした角尾内科の集

いは和氣藹々たるもので、先生の得意とされた浜節の名調子も今や忘れられない思出の一となりました。

殆んど壊滅状態となつた長崎医科大学の再建の困難を思う時、名学長として行くとして可ならざるなき、殆んど疲れを知られざる御奮闘をされた先生、中央にあつては學術研究会議のマリア委員会の委員長として采配を振られ、又全国医專の内科学の新教程を編纂され不動の地位を占められた先生、お年と共に益々円熟の境地に入られた先生、戦時中は母国勝利のために学長として非常に努力されましたが、それとなく軍人が科学者を遇する道を知らぬことを歎ぜられた先生を思う時、今こそ思い残すことなく、縦横にその御力を發揮して頂ければと思ひましたのに、天は先生に余命を藉さず再び先生をこの世に揮する事は出来なくなりました。

然し先生の残された偉大な感化は長く私達の中に染み、忘れんとして忘れ得ざる所であります。もとより私達は甚だ微力ではありますが、今後とも先生の無言の御教示を拝し、日本再興の一大急務たる科学振興の道にいそしむ事をこゝに先生の御霊の前に誓うものであります。

生前あまりにもお忙しかつた先生、どうか安らかにお休み下さいませ。

昭和二十一年八月二十二日 角尾内科理医局員代表

篠 島 四 郎

## 原爆被爆当時の憶い出

高橋博

昭和二十年八月九日午前十一時少し前、早朝来の空襲警報がやつと解除され、遅い朝食を附近の下宿でとつた私は、箄島助教（現教授）、中村助手達と角尾内科三階看護婦室で談笑していた。角尾教授はすでに外来（本館三階西端北側：爆心地に向つた方向）診療をはじめておられた。箄島先生は、医専の卒業試験で学生のカルテの出来上るのを待つておられたのである。

と、突然、低空飛行のような大きな爆音が響いて来た。私達は思わず身を臥せた。その瞬間、すぐ前の庭で破裂したような凄しい爆発音が聞えた。爆風と共にあたりは真の暗闇となつた。この間は随分ながいように感ぜられた。看護婦達の泣き声とも、呻き声ともつかぬ声が聞えて来る。暗闇は次第に赤色に変わり薄れて行つた。火事だという叫び声があがつた。レントゲン疎開跡が少し燃えている。部屋のなかは戸棚がくずれ、天井は落ち、窓はとび全く旧形をとめていない。至る所バラ／＼になつた木片がうづ高くつもつて歩くことも容易でない。病院から見える家とゆう家は崩れ落ち、マツチの軸を散らしたように見える。たつた一発の爆弾でこのようにやられるとは今まで考えてもみなかつたことである。これは新型爆弾に違いないと思つた。

箄島先生や中村君は無事であつた。箄島先生は何か固い物があつたと頭をなでておられた。私は手に少し負傷したが大したことはない。看

護婦達は何人かガラスの破片で負傷していた。髪は乱れ、顔は埃で汚れていた。爆心地から六〇〇米―七〇〇米位の近距離にありながら、この程度の被害で済み誰も死亡者を出さなかつたのは、看護婦室の爆心地側にエレベーターがあり、厚い壁が爆風と放射線をさえぎつたためであろう。私達は爆風は爆心地と反対の南側からはいつて来たように感じた。

角尾先生や教室員、患者のことが気になつた。私達は手分けして皆の安否をたづねた。間もなく外来から角尾先生は怪我をしておられるが、元氣だとの声があり、私達もそれを聞いて安心した。当時空襲が日を追つて激化していたので、入院は必要最少限度に止め、入院患者は全部で十八人であつた。十一号室の患者が一人、自宅に帰つておつたらしく、どうしてもみつけることが出来なかつたが、他の患者は皆無事であつた。重症の肺炎患者も無事であつた。この患者は当時未だ珍らしいペニシリン（伝研試作品、五cc五〇〇単位のもの）を角尾先生が手に入れて使用され、漸次快方に向いつゝあつた患者である。然し外来治療にこられたお婆さんはかなりの怪我をして動けないようであつた。学生達がかけつけて担架で運び出そうとしていたが、飛び散つた十円札をとつて呉れと、困らしていた。廊下には見知らぬ女の人が一人倒れていた。箄島先生と私は夢中で地階まで運んだが、すでに死に瀕していた。誰かゞ、外来の様子を見に行こうと思つたが、外来に行く廊下が落ちて行けないといつていつていた。レントゲン、薬局方面の火は次第に強くなつて来た。内科病棟内でも配膳室前の廊下でもチヨロ／＼と燃えはじめていたが、箄島先生がいち早く発見し、すぐ消し止めた。然し周囲の炎は増す／＼強くなつて行く。私達は全員、裏の山に避難することにした。

先づ、看護婦達に歩行出来る患者を連れていつてもらつた。歩けない  
外来患者は学生達が担架で運び出してくれた。箆島先生と私が肺炎患者  
を運ぶことにした。地階は木片の山で廊下はとても通れなかつた。それ  
で私を通れる道を探すためK内科患者の死体が二、三ある廊下から、耳  
鼻科側の裏道にぬけると、すでに箆島先生は患者を背負つて、木片の集  
積した上をヒョコ／＼と歩いておられた。私達は交代で患者を背負い、  
咽喉が焼けそうに熱い風をすいながら、やつとの思いで病院玄関前から  
山の方に出る事が出来た。

私達はどうにか患者を安全な丘の上に避難させる事が出来た。何んだ  
か、私は非常に疲れていた。動くとき非常に身体がだるかつた。私達は角尾  
先生の後を追つた。先生は学生に背負われていた。そして私達の無事を喜  
ばれた。私達も先生が怪我をされてはいるが、生命には別状なさそうな  
御様子なので安心した。私達は代る／＼お臀の傷に触れないよう注意し  
ながら背負つた。途中の道端に倒れている人達の間から「石崎だ／＼、  
僕だよ」という声があるので、驚いてみると、顔が真丸くふくれ上り全  
く人相が違つてはいるが、正しく外科の石崎助教授だ。寒いと言うので、  
その附近にあつた蒲団を被せてやつた。(蒲団がどうしてこのような所  
にあつたか分らない。恐らく誰かど持つて来て、途中で捨てたものではあ  
らう。) 大した怪我はなさそうだが、火傷を負つたのか顔が随分腫れて  
いた。

小高い丘の芋畠のなかに角尾先生をねかせた。中村君や大倉君(副手  
補)等が、何処からか蒲団を持つて来て急造のベットにした。時々敵機  
が上空を舞うので、爆風ですつかり葉がとんだ芋づるを先生の上にか

て偽装した。

黄副手、木田橋、清田副手補、岳下看護婦も一緒に集つた。角尾先生  
も、彼等も一様に悪寒口渴を訴えた。なかには嘔吐する者もいた。私達  
は上衣をぬいでかけてやり、又何かひろつて来てはかけてやつた。前田  
婦長は甲斐々々しく看護していた。大倉君、中村君は下の方から水をく  
んでは皆に与えて超人的に仿っていた。当時私達は何故彼等が特に悪寒、  
嘔吐の症状を訴えるのか、見当がつかなかつた。爆撃のショックとして  
は可笑しいと思つた。

浦上一帯は炎々と燃え上り、焰は囂々と天に沖している。すでに内科  
病棟にも火が廻つている。天は煙のため暗く、時折沛然たるシユウ雨が  
黒い雨矢を降らしている。この世の地獄と思われる凄惨な光景である。

丁度調教授が来られたので、角尾先生の傷の手当をして頂いた。教授  
にはその後も度々手当をして頂いたが、御令息が原爆でなくなられた悲  
しみを少しも面に出さず、熱心に活動しておられるのには全く感服した。  
先に避難した看護婦と患者達は、更に上の方にいた。皆無事であつた  
が、なかには相当の火傷を受けている者もいた。手当の材料が全くない  
のが残念でたまらなかつた。

角尾学長がおられるのを聞いて、高木教授が学生に負われてやつて来  
られた。何時も元気な先生が、どういふものか全くグンニヤリしておら  
れる。然し怪我は一つもなかつたようだ。全く不思議に思つた。角尾先  
生も首をかしげておられた。脚気衝心によく似た症状だがねと。

誰かど大学本部の旗を立てたが敵旗が度々やつて来るので、すぐさま  
引込めざるを得なかつた。

他の人達はどうしたであろうか、山をこえて避難したのであるうか。外来にいた鈴木君は？学生は？基礎の人達には随分沢山の犠牲者が出た模様であつた。

夕方近くなつて乾パンがとゞいた。私達は砂をかむ様な気持で食べた。下界は衰えることなく燃えつゞけている。私達の愛する教室も燃えている。私達は身をきられるように辛かつた。

私達はまだ小さい芋を生のみ、嚙つた。又誰かゞ持つて来てくれたキウリを嚙つた。何だか少し精氣を取戻して来たように感じた。

高北病棟に入院していた樋渡君が近くの丘に在るとの情報がはいつた。私は早速、彼を探しに行つた。彼はチフスのため入院していたのであるが、自力でこゝまで逃げて来たのである。其の夜は山で夜を明すことになつた。私は全く疲れきつた彼のそばの芋畑の上で一夜を過すことにした。寒がるので上衣を彼にかけてやつた。下界は天をもこげよとばかり、なお燃えつゞけていた。時折敵機が頭上を飛び、照明弾が炸裂した。

苦しい一夜が明けて十日となり、木田橋、清田両君は家族と連絡がつき、山を越えて自宅に向かつた。然しその姿には元気がなかつた。両君とも間もなく自宅で亡くなられたのである。

この日、私達は角尾先生、高木先生、石崎君を、外科教室横の防空壕にお移しして治療を加えることにした。樋渡君は高南病棟浴室に移した。箴島先生と婦長は角尾先生達の治療や看護に献身的な努力をされた。中村君、大倉君に私達は、眼科地下室、皮膚科地下室、高南病棟トンネル内に收容された学生達の治療と看護に忙殺された。無人の薬局や、各科地下室の非常箱より注射薬や衛生材料を集めて使つたのである。一、二

年の学生は倒壊した教室から、辛うじて這い出し、やつとのことで、こゝまでたどりついていた。皆一様に悪寒、嘔吐、口渴等を訴えていた。当時、病院には私達内科の者しかおらず、私達は自らも苦しいなかを皆のために仿いたのである。

高木教授は十一日、石崎君は十二日に、苦しみながら死んで行かれた。高木教授は終始興奮し、石崎君もしきりと手術のウワ言をいつていた。

十一日であつたか、眼科横の防空壕に頭部を負傷された山根教授が一人でおられると聞き、私達の壕におつれした。

額に負傷されて鉢巻をした古屋野教授が、学長代理となられ、この頃から大学の指揮をとられるようになった。陸海軍よりも救護隊がかけて、皆の治療に当られた。町との連絡もつくようになり、山越えした患者は新興善小学校に收容されていることも分つた。

角尾先生は壕のなかでは一番軽い患者であつた。高木教授、山根教授等の治療について、冷静に指示されていた。そして、自分は老先短い身だからいゝが、君達は若いんだから、身体を大事にせにやあいかんよと私達をいたわられた。先生は自分の苦痛は少しも洩らさず、静かに寝ておられた。私達はこんないゝオヤヂを早く元のように元氣にしてやらねばと思つた。

救援隊も来たので、学生達の治療はおまかせし、十二日夜箴島先生、中村君、私、婦長は角尾先生、山根先生を陸軍好意のバスを借りて道の尾にお移し申上げた。これは調教授の治療を受けんがためであつた。当時調教授は道の尾滑石に疎開しておられたのである。

同夜は道の尾岩屋クラブの板の間の上に、角尾先生は不平も言わずや

生まれた。翌十三日、再び滑石大神宮の拜殿にお移し申したが、こゝで先生は被爆以来はじめて畳の上に、而も調教授にお借りした蒲団の上に寝られたのである。

翌十四日、私は中村君と連絡のため大学に引返した。この頃から私も発熱し、口内炎を起すに至った。十五日には終戦の詔勅のあつたことを一同古屋野学長代理から聞き、死に瀕した学生達と共に悲憤の涙を流したのである。この頃バタ／＼と学生達は死んで行つた。樋渡君も十五日、病棟にあてられた調外科病室（今のX線教室）で亡くなられた。

私は吉崎君や大倉君達の治療を受けたが軽快の徴がないので、帰省加療の決心をし、角尾教授にお別れの挨拶のため、再び十七日道の尾に立寄つた。

山根教授は十五日テタヌスのためとう／＼お亡くなりになられていた。角尾先生の容態もはか／＼しくなかつた。発熱、皮下出血、口内炎等の病状がみられるようになっていた。

私は自分の容態を申し上げお暇を頂きたいと申し出ると、先生は動かないで、こゝでゆつくり養生するがよいと引止められた。其の夜は高熱のため度々うなされた。私は遂に翌早朝、先生が、未だ寝ておられる時、意を決して、そつとそこを抜け出したのである。

先生が八月二十二日遂に御他界なされたことを療養先で聞き、最後のお別れの挨拶もしなかつたことを心の中で深くお詫び申し上げたのである。

（横田内科勤務）

## 思 い 出

前 田 ハ ル エ

九日の朝空襲と共に寄宿舎で同室の小児科中尾婦長さんと今日も無事でと廊下を左右に別れを告げた。空襲は間もなく解除となり警戒警報となつた。やれ／＼とモンベ三枚を一枚にして、又空襲までと一同仕事に取りかゝた。

十時になると角尾教授の臨床講義も済まれる。其の後、丁度外来診察日なので直ちに外来診察室へ入られた。私は書類と物品請求書に捺印して戴くために行きますと、お茶を飲みながら、空襲があつたら僕は本部（当時学長であられた）へかけつけなくてはいけないから上衣と帽子をこゝへ持つて来て呉れ、と申されましたので、直ぐ病室へ帰り部長室（四階）に行き上衣と帽子を取つて下へおりました。看護室の前で中村先生が、婦長さん此の前からお願ひして置いた若い医局の先生方の名札を今警戒警報だからちよつと書いて下さい、といわれ、私も忘れていたので立ち寄り治療室の処まで五、六歩行き、其の名札を手取る瞬間であつた。

電光石火とはこんな事か知らんと思う。其の瞬間目もくらむ光の強さと同時に凄い音。耳も身体も飛んで行つた様な、そして背部にとても熱い爆風を感じ、丁度たゞきつけられた気がしました。それまではよく覚えて居り、其の後どれくらい時間が経過したかわかりません。目をあけても、あけてもあたりは真暗で、物は見えず、自分の呼吸しているのも



わからずこれが死んだのかなあと思つた。そのうち、段々明るくなつて来たのであゝ生きていたとあたりを見ると板や壁はくずれ、棚の上にある物は吹き飛ばされ身動きがやつと出来る位で名札を取る時と、反対の位置に坐つて裸足になつていた。立つてみるとモンペはほころび、髪は鳥の巢の様に、顔や手も煙突掃除でもした様な姿であつた。病室や廊下は天井板が落ちたりどこから飛んで来たのかと思ふ様な物が散積して、足のふみ場のない位であつた。

箴島、高橋、中村、土山の四人の先生方も看護室におられ、負傷は高橋先生がひどかつた。私は別に傷は無かつたが、どこから来たのか白衣に血液が綺麗に全体的に附いていた。それが不思議でならない。

病室を先生と見て廻つたが患者さんは一人も居られなかつた。十台のベットは其の儘で何一つ無く唯広々として死亡者はなかつた。一同は地下室（研究室）へ下りた。外来が気になりつゝも廊下は落ちていたので連絡がつかない。先生方が飛行機は飛ぶし一応待避しようとおつしやるので、日頃部長先生より空襲には必ず持つて出る様に依頼されていた大包みと座布団を持ち、地下室を通つて薬局の裏に出た。其処に永井先生がいらして角尾先生は負傷されて教室の先生方が山の上に救出されたと知らせて下さつた。

永井先生から道を教えて戴きタオルで大腿と下肢をくまゝり（モンペがひら／＼して歩きにくゝて）重い大包と座布団を持つてやつとたどりつきました。其の道々には裸の死体がごろ／＼ころがって目を覆ひ度くなる。中には目が飛び出したり、唇がむき出してあかかクロンボの様な屍体もあつた。今でも仮装行列によく黒人のまねをするのをみるとあの当時

が思い出されて悲しくなる。

角尾先生は傷を受けておられたが、案外お元気でいられたので安心しました。私が大包を持ち出した事をとて感謝されるので、私もそんな大事な書類が入つている物を出してよかつたと思ひました。上京される時も余りにお頼みになられますので、私もやつとの思ひで持ち出したのですが、責任を果したことを嬉しく思ひ、後でお聞きしましたら博士論文の原稿資料だつたさうです。

山の上に着く迄に箴島先生は裸でガタ／＼ふるえている女の人にレインコートをやつたり、ゲートルで人を背負つて救出してこられたりされた。山の上と云つても甘藷島でいもの葉はなく、つるばかり。又四方の山々は焼けて青いところはなくこげついた様な山々であつた。広島のある日の様子を見て来られた角尾先生は、原爆だよとおつしやつた。

丘の上に居ると、あちらこちらで友を探す声、親を探す子、助けを求め声、死期の迫つた苦痛の声、それはさながら地獄の様であつた。永井先生は戦地に行つても、こんなひどい事は初めてだとおつしやつた。学生さんがどこからか布団を持つて来て下さつた。調教授、木戸先生方が直ちに傷の治療をして他の方へ行かれた。その後、永井先生はシャツに赤く血液をつけて旗を作り、傷ついた者はこゝへ集れといふながらそれをたてられた。その時、葉専の清木先生が学生二三人をつれて裸身に大きい丸たん棒をついて、丁度鬼に金棒と云ふ恰好で辿りつかれ、「学長先生御報告いたします。学校は全滅です。自分たちは防空壕を掘つていて助かりましたが、入口にいた者は即死でした。」とお伝えになつて又山の上の方へ行かれた。其の時レントゲンの久松婦長さんが私を呼んだ

が見ていて返事をしなかつたので、放心したのかと思われたそうである。私は全然会つたのは覚えていません。

角尾先生の傷は、後頭部、後背部、後大腿であつた。新患室にいらした黄先生は大した傷はなかつたが放心した様な状態で落付いていられたなかつた。村田先生は記載係で大傷を負つて、丘の上まで運んだ時に駄目だつた。看護婦は散り散りとなり新患付の内尾さんも傷付いて高北の地下室へ運んだ。加藤、大山さんは寄宿舎に着いた頃で死体もわからない。森下、立川さんは駅まで荷物を運んで行くとして、表玄関で二人で行李を持つた時、一人は負傷し、一人は無傷であつた。検便室にいた宮本、吉本さんは一人は顔全体ざくろの様になり、一人は負傷してやつと歩ける位。緒方さんも傷つき、中山さんは高北勤務で当直明けで風呂に入る処らしく、風呂場で即死していたとか皆泣くにもなけない状態であつた。

木田橋先生や清田先生も負傷して、角尾先生と一緒にいられた。そこへ基礎教室の高木教授が救出されてこられた。どこも傷はなく少し頭がおかしいと思ふ程で、落ちつかず何にもおつしやらずにそわ／＼していられた。

其の内雨が降つて来た。こんな時は必ず雨が降るものだよと角尾先生はおつしやつた。時のたつのも暑いのもわからず、やがて夕方となり、乾パンとおむすびを調教授から戴いた。看護婦の負傷者も出ているので気になつていたら、角尾先生が「婦長は看護婦の世話をしなげなくてはいけないのに、自分丈については済まない」とおつしやつたが箴島先生初め他の教室の先生方が看護婦の世話は僕たちでするから、婦長

さんは部長先生を頼むとおつしやるので、角尾先生に附いていました。負傷された木田橋先生や、清田先生は悪寒が来てガタ／＼していても着る物はなく、カマス袋を着て横になつていられたが遂にたまりかねて「部長先生少しおふとんを着せて下さい」とおつしやると部長先生は「遠慮なしに入り給え」と云われて、一枚の布団の中へ三人で足をつゝこんでいられた。大倉先生が元氣よくどこからかカボチャを持つて来られたら角尾先生は「トウナスだね。どこから持つて来たか」と喜ばれた。夕やみとなりやがて夜となつた。寒くなつて着るものがないのでいもづるを着て土の上に一夜をあかしました。

夜中にどこの人が負傷して「寒い／＼」と云つてふとんの中に入つて来られ一枚のふとんの中に六人位入つておられた。唯足を入れては丈ですが寒さが凌げたらしい。あつち引つ張りこつち引張りお互いに引張りあつて、傷のある人は痛みを訴えた。水を欲しがると出たら大倉先生は僕が汲んで参りますと云つてバケツに汲んで来て下さつたが、直ぐに飲んでしまい、又々汲みに行かれたりした。一人の方は飲んだかと思ふと皆嘔吐をして朝は亡くなつていた。

角尾先生はちつとも水の事はおつしやらなかつたが、どなたか名前はわかりませんがビール瓶に水道の水ですと持つて来て下さつたので、それではと少しお飲みになつた。高木先生にもおすゝめしたが余り喜ばれなかつた。私は別に空腹も感ぜず水も欲しくなかつた。病院を丘の上から望むと次から次へと焰を挙げて風向が変る度に燃え移り、最後は内科の図書室のあの厚い／＼図書が焼けて行つた。それを唯見る丈で手の施し様もなかつた。

土の上に一夜は明けた。部長先生を飛行機の来ない内に防空壕の中へお運びする事になり外科手術場の裏の壕へ高木教授も一緒に運びして高い寝台の上にお寝せし、一方の穴に眼科の山根教授も運ばれて来られたが、台がなく土の上に板を置き敷布団を敷いて、又一方には外科助教授の石崎先生を石の上にお寝せした。

高木教授は何も召し上らず懐々として落付かれず、高い台より飛び下りたりなされ、一度影浦教授に診て戴く様にと角尾先生が先生方におつしやつたが、十一日の夕方亡くなられた。

山根教授はともひどい傷でよくも生きておられました。前額部に大きな傷口が開いてどなたか見当がつかず、お声でわかる位でしたが、とても我慢強い方でしょう、訴えは余り有りませんでした。眼科の方はどなたも来て下さらないので角尾先生は誰か助かっているだろうにと申されても仕方ありません。石崎助教授もひどく、殊に顔面はざくろの様に皮膚はむけ、お熱があり意識も混濁していられ「婦長さん熱いお茶を下さい」と申されるので「熱いですよ」と熱いのおあげしますと、「もつ熱いのを」とおつしやる。又古屋野先生がお見舞に来られて山根先生の処へ行かれたら「あのね、果物にナイフを添えて古屋野先生へおあげして下さい。」と私にたのまれる。御自分の処には何も無いのに。古屋野先生に申し上げますと、先生は「石崎君。僕の事は心配要らないから君一生懸命頑張るんだよ」「有難う〜。」と男泣きに泣かれました。そして翌十二日に亡くなられました。

飛行機は飛ぶし湯を壕前でわかしていてもあわてゝ火を消して壕の中へ入つたりした。あたりは麥り果てゝ見当が付かず、やつと表門の処へ

出て見ると病院の下の町は見渡す限り砂漠の様で何一つなく、水道も一つ丈出ていて水汲みが盛んであつた。高南病棟の地下室の処にはベットの藁を引き出してあたかも馬小屋の様で、そこへ負傷者が一杯群れて足のふみ場もない位であつた。其の中に学生さんもられ「婦長さん、僕ですよ注射して下さい」と次から次におつしやるが、お顔も見分けがつかなくて気の毒であつた。皮膚科の瀧島婦長さんとお会いしてどこも傷のない私に、自分はこんなにやられてしまった、と青い顔をしていられたがその後自宅で亡くなられたとか。

防空壕の前に十五、六才の男の子が死んでいたが、三日目位に其の母親が探しに来て「元気で仕事に出たのにこんな姿になつてしまつて。探してもわからない筈だ」と云つて悲しまれた。丁度其日大学の電気工事に来ていたらしい。

八月十日は弟の（村葬）である事は知つている筈だから、生きていたら帰つて来ると家では待つていたが帰らないので、もう死んだものときめてお通夜をしていた。そこへ隣村の吉本さん（看護婦の父親）が見えられ、私は元気でいるが、着のみ着まゝでしかもはだして着替えてと食料を持参して呉れる様に頼まれた、と話されたので家では生きていたかと喜び、私のために汽車の切符をやつと手に入れて、朝五時頃家を発ち長与のトンネルで三時間も待避したとかで着いたのが午前であつた。

角尾先生は「看護をして貰つて有難い」と父におつしやるので、父もお言葉に感激して無理に連れて帰れず、又来る日を約束して帰つた。

十二日の夕方軍隊にいられた松永軍医さんが軍のトラックをお願いし

てやつと道の尾の山の中へお運びする様になり夜に乗じて行く事に決つた。角尾先生、山根先生其の他学生さん、看護婦二名位であつた。

其の中に宮本さん（看護婦）は顔面をやられ、さくろの様に表皮はとれ目丈は見えると云うが、こちらから見るとだれだかわからない。唯声でわかる位であつた。「そんなにわからないのか」と泣くし気の毒でならなかつたが、翌日から迎えに来られて歸つた。

道の尾迄の道が悪くデコボコでしかも暗く、山根先生は帯でくくりつけていたが動搖が激しく、帯も切れる位のひどさであつた。時間もどれ位経つたのかわからない。何んだかサワ／＼するので見ると竹山であり、爆弾以来青い物を見なかつたので、急に生き返つた様なせいとした何んとも云えない気持であつた。角尾先生も「僕も見たい」とおつしやる位青い物にうえていたのでした。山根先生は苦痛らしく「まだ着かないのかね。」とおつしやる。益々、気の毒でならなかつた。

懐中電燈を付けたら村の警防団に叱られた。「火をつけるとは何事だ。又こゝが空襲される」と云つてかんかんにやられた。情なくて泣けて仕方になかつた。

着いた処は田んぼの中の一軒家で畳が一枚か敷いてあつた。そこへ角尾先生を置く様にしていたら、学生さんがねていられたので「板の間でいゝ」といわれ、そこへお二人を移した。他の人々も運ぶと水を欲しがする。井戸が近くに有ることがわかつたので、飲む人は沢山飲まれた。そんな人達は翌朝は亡くなつていた。水を飲んだ為めか下痢が起きた。次から次へと下痢症状で死んで行かれた。朝になつてみると其の附近は不潔であり、森の中が安全だろうと、又々森の中の大神宮の拝殿にお移し

しました。リヤカーでデコボコ道を日があたる処は日傘をさしかけてやつたりして静かな森の中へ入る。こゝならば飛行機が来ても大丈夫だろうと思つた。其の準備、夜具一切調教授のお宅から出して戴き奥様にも何やかとお世話して戴いたのでやつとお布団の上にお寝みになられた。

調教授のお宅もお子様方お二人が亡くなられたとかで何かとお忙しいそうだつた。調先生は慣れない山の中に、昼間は外科の先生方や、看護婦二名と施療に廻られ、夜だけ神社の処へお寝みになつておられた。箴島先生、牛島、中村、土山、諸先生もお見えになつた。角尾先生は皆な来てくれてとお喜びになりました。別に注射はなく傷の手当丈でした。

田圃の近くに水源地があつたので飛行機の来た時は木の下に隠れながら、水浴を先生方と交代でした。被爆後初めて顔や手足を洗ってさっぱりした。

森の中にもう一軒有つたが、そこには兵隊さんが二十人位いられ、竹やりなど持つて敵が上陸する処を突くんだと意気込んでいられた。其の夜、是非其の兵隊さんの風呂に入れとおつしやる。角尾先生は「好意に甘えて入れて貰いなさい」と云われるので入れて貰いました。忘れもしませんお湯は足がやつとのことかくれる様なお風呂で気持が悪かつた。

先生は「婦長お風呂でさつぱりしただろう」とうらやましそうにおつしやつた。お食事は何も召し上らず、又私も炊き出しの処までお二人の先生を置いても行けず食べない日もあつた。

山根先生の傷からは破傷風菌が入って、ちよつとの音でも痙攣が起つた。神社ののりとを上げられる時や、太鼓をたゞかれる度に痙攣されるので、「何んとかならないか」と角尾先生は申されたが、神社を借りて

いることゝ無理も云えなかつた。益々痙攣が強くなつて水も通らず、日頃お酒が好きだつたのでしよう、鼻腔栄養で酒かアルコールを入れて呉れと木戸先生におつしやつたが痙攣が起るのでどうしても入れられない。せめてアルコールガーゼでも嗅がしてくれと頼まれるので嗅がしていられた。お食事は一口も通らないし、益々容体は悪化するばかり、苦痛でパントポンを注射して欲しいとおつしやつたが、余りにも苦痛が激しいので注射器につめて用意した。木戸先生が来られてからが良いだろうと、角尾先生がおつしやられたので、その通りにして居りましたが、遂に敗戦の発表の有る直前に亡くなられた。角尾先生は「山根君はこの報道をきかないで逝つたので幸福だつたよ」と云われた。残された先生と私は拜殿の月の光りの中で泣いた。先生は「もう泣くな」と御自分でも泣きながら敗戦国のお話をして下すつた。

其の翌日から下痢症状が出て箴島先生に連絡を取りましたら、すぐおいでになつた。便の状態をお話して先生と協議していられた。便は赤痢患者の便とは少し変つて悪臭はなく、血液もなかつた。色が灰白色に近く回数が多い丈であつた。

葡萄糖及びヴィタミンの注射薬も沢山有り、注射して居りました。頭の傷は良くなり繃帯は取れましたが、物が二つに見える云つて目がねの一方に紙をはり、一つ目にかけておられた。敗戦の報でも飛行機は低空で来るので交通も思う様に行かぬらしく、全くとだえて、食べる物もなくどうしてよいかと思つていると幾年か前入院していられた吉田さんが尋ねて来られたので、角尾先生は私のために何か持ち合せは有りませんかとおたずねになられたそうです。それから吉田さんが食料や炭

を運んで下さり、今度は私がお礼のお返しだと云つて助けて下さつた。

貯水池まで細い道がちよつと坂をなし、元気な時だつたら何とも思えない位ですが、その坂を往ききして水を汲むのが大儀になつた。このまゝしていると自分も倒れるのではないかと気になり、こゝにいて若し自分が倒れたら先生を誰がみて下さるのだろうか等と心配していたら、角尾先生の奥様が来て下すつた。それで後をお願いして家へ帰り元気になつたら又看護に當るつもりで帰らして戴くことにして、森の中の神社を後に、一歩一歩後髪を引かれる思いでお別れした。先生は私を見送ると云つてわざ／＼起きて、目がねをかけて見送つて下すつたのが最後のお別れであつたとは、後で知り残念で／＼なりません。

其の途中箴島先生とお会してよほど引返そうかと思いましたが、其の元気が出ませず其の儘、道の尾の駅まで行き、齒科の富崎先生とお会いし、証明書がないと汽車に乗れないとの事なので、どうしたらよいかとおたずねしたら、駅長さんにお話したら乗れるだろうと云われたので、駅長さんにお願ひしてやつと乗る事が出来た。それは貨物で、長崎から引揚げる傷付いた人々と一緒でした。言葉もなく暗い気分であつていた。喉がかわくので一駅降りて次の汽車と思つても、のりおりが出来なくて、其の儘十一時頃(夜)我が家にやつとたどりついた。それまでは覚えていたがそれから後は暫くわからなくなつて、二三日は放心状態だつたそうです。

まだ／＼書きたい事も沢山有りますが、八月二十二日迄の事を記して、願わくば再び原爆の惨事を見ない様に平和を祈りつゝ、ペンを置きます。

(横田内科勤務)